世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

鄭道昭・論経書詩考Ⅱ：「十」字未損本と『掖縣全志』による摩泐字の再検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 裕之 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/503

鄭道昭・論経書詩考Ⅱ

―「十」字未損本と『掖縣全志』による摩泐字の再検討―

A Study of the Poetry about Confucian Classics by Zheng Daozhao II
―"Ten" Letter Undamaged Book and Reconsideration of the Worn Character by *Ye xain Quan zhi*

廣瀬裕之*
HIROSE Hiroyuki

はじめに

北魏の永平四年（五一一年）、山東省莱州市にある雲峯山中腹の巨岩に刻された鄭道昭摩崖「論経書詩」は、約千五百年の歳月を経ているため、刻された文字が磨泐した箇所が多い。そのため不明字が多い詩文となっている。そこで『武蔵野大学教職研究センター紀要・第四号』（以後、前号と称す）所収の拙稿「鄭道昭・論経書詩考―旧拓整本による不明字解明の試み」において、約三十字にも及ぶ異説や不明字の類のうち、まったくわからない文字を六字にまで減らすことができた。本稿は、これを承けるものであり、今回は『掖縣全志』の記述を考証しつつ旧拓及び意味上からの検討を加えたことにより、推定を含めまったくわからない文字をあと四字まで減らすことができた。そして、なるべく判りやすい現代語の直訳を試みたものである。

刻文冒頭

行数

1 詩五言與**道**俗十◆
2 人出莱城東南九里
3 登雲峯山論經書一首
4 魏中書侍郎**通**直散騎常
5 侍國子祭酒秘書監司州大中正出爲
6 使持節督光州諸軍事平東將軍光州
7 刺史司州滎陽鄭**道**昭作

詩五言。**道**俗十人と莱城を出で東南九里の雲峰山に登り、

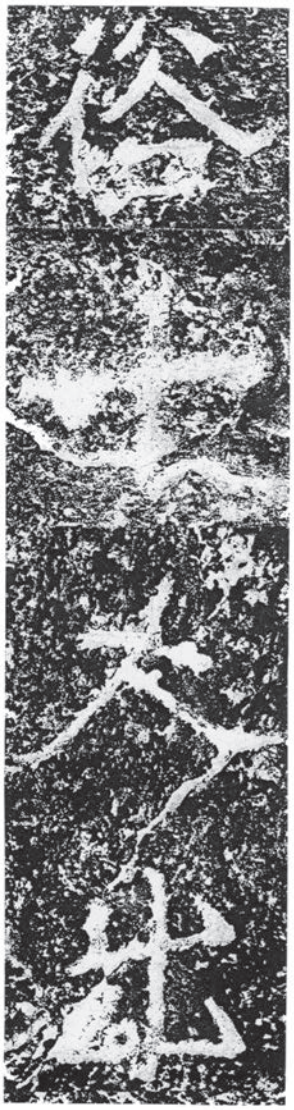
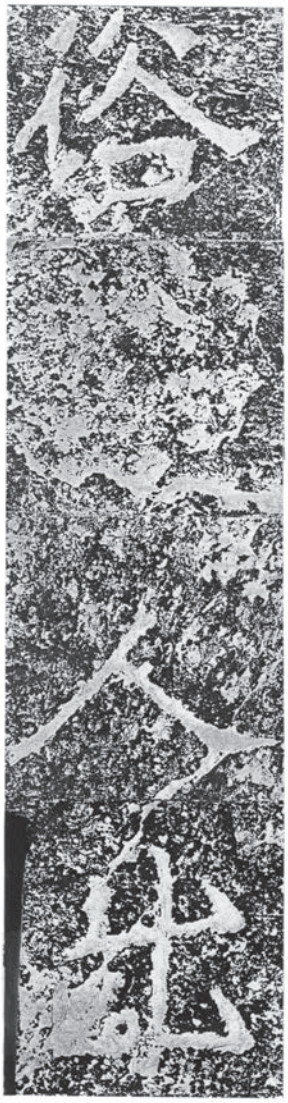
二

経書を論ず。一首。
魏中書侍郎・通直散騎常侍・國子祭酒・秘書監・司州大中正・出でて使持節・督光州諸軍事・平東將軍・光州刺史と爲る
司州滎陽・鄭道昭作

右の刻文中の◆を「十」とした根拠を前号では、光緒十九年（一八九三）刊行の『三續掖縣志』巻之四訂譌中の論経書詩の釈文「道俗十人」という記述によることを述べた。光緒十九年は、日本では明治二十六年に当たる。

ところが、この箇所に明らかに「十」字が見える精拓の存在が判った（表1参照）ので、本稿では、このことから論を進めたいと考える。

◀表1

十字未損本	書壇院本
	

この拓本を「十」という漢字がまだ損なわれていないという意味から、ここでは論経書詩「『十』字未損本」と記すこととした。

論経書詩「十」字未損本

この「十」字未損の論経書詩の拓本は、山東石刻芸術博物館・莱州市博物館『雲峯刻石全集』（斉魯書社出版一九八九年七月発行）に掲載されているもので、整本と剪装本の二種類である。「十」という文字が他の刻された文字と比べると拓影がやや淡く感じられるが、はっきりと見える。この『雲峯刻石全集』は、山東省の四つの山々に刻された鄭道昭摩崖全拓本を集めたいわゆる「雲峯山全套」を一冊にまとめた本である。この二種は、同時期に採拓され、整本と剪装本に装丁されたものと考えられる。

前号で紹介した東京にある書壇院蔵の旧拓整本写真と改めて詳細に比較してみると、前回気付かなかったが、書壇院蔵の旧拓整本のこの部分にもごくわずかながら「十」の横画収筆部の痕跡と思われる刻線が見られることが判った。さらに、二行目第一字目の「人」字（表1参照）の一画目の起筆部の長さの違いと横にのびる傷が気になる点だが、しかし、その他の文字に関しては書壇院蔵旧拓と文字の摩滅具合がさほど変わらなかったため、この拓本による新たな不明字解明の進展には至らなかった。

二つの『掖縣志』の記述による再検討

『再續掖縣志』は道光二二年（一八四二）【日本では天保一三年】に刊行され、『三續掖縣志』は、光緒一九年（一八九三）【明治二六年】に刊行されている。これらは雲峯山の存在する莱州市（旧称・掖県）にかつてあった掖県の知事等の命によって編纂された記録である。『掖縣志』は『三續掖縣志』が刊行されるまでに四種刊行されたが（注1）、木版で刷られたこれらの刻本をそのまま魏起鵬等によって合訂増補し十六冊にまとめられたものが『掖縣全志』である。この中に論経書詩の釈文が掲載されているので、次は、これをもとに比較しながら考察を加え、更に検討していくこととする。

釈文比較と現代語訳

摩崖刻の八行目から始まる「論経書詩」本文の漢詩文五言古詩全文（四十八句）をつぎに記す。先に述べた二つの『掖縣志』中に記された釈文を次表のBとCに、考察した結果をAとして記した。

	A 廣瀬	B【再續掖縣志】巻上 道光二二（一八四二）	C【三續掖縣志】訂譌 光緒一九（一八九三）
1	靖覺鏡□津	靖覺鏡□津	靖覺鏡□津
2	浮生**慮**人職	浮生**慮**人職	浮生**慮**人職

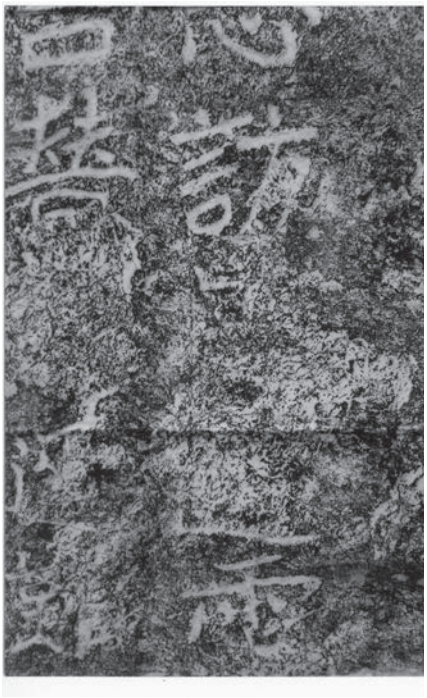
1の4字目は、摩泐激しく不詳。「□津」は、場所名もしくは船着き場・港の意を表していると考える。

靖覺　□津を鏡（てら）し、浮生　人職を**慮**（いと）ふ。

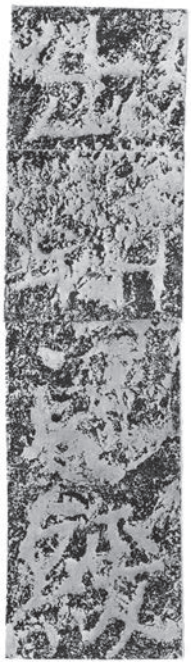
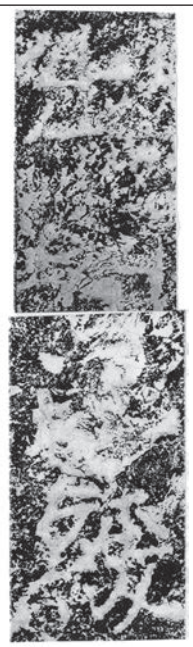
・やすらかなさとりは□津（船着き場？）をてらし、儚（はかな）い人生は、人の世も官職もわずらわしい。

靖（やすらか・しづか・良い・あらはす）、覺（さとり・道理をしること）、鏡（照らす）、浮生（人生の定まりないこと・はかない人生）、『荘子』刻意「其

◀写真1



◀表2　「出朝津」または「出朝廷（廷）」か

書壇院本	十字未損本
	

生若浮兮、其死兮若休）、**慮**（厭・いこふ）

3　聳志訪**引**（推）**遊**　　聳志訪□**游**　　聳志訪□□

4　雲峻期登陟　　雲峻期登陟　　□峻（脱字）▲登陟

3の4字目は、前号で□、つまり左上上部に「コ」の刻跡（写真1の1行目参照）が旧拓に見られることを述べた。あくまでも推定だがここから考えると「引」の文字が候補として挙げられる。

「引」とした場合、「引率」・「引退」という2つの意味が詩文から考えられる。

志を聳（そばだ）て引きて遊ばんと訪ね、雲峻きも登陟を期す。

・高い志を持って、引率して（身を引いて?）遊覧しようと訪れた。

雲は高くたとえ厳しくてもこの山に登ろうと心に誓った。

峻（たかい・きびしい）、登陟（のぼる・のぼらせる）、期（あふ・ちぎる・約束する）

5　拂衣出**朝津**（廷）?　　拂衣出**州**疑□　　拂衣出**朝疑廷**疑

6　緩歩入煙域　　緩歩入烟域　　緩歩入煙域

5の4字目が「朝」字か「州」字かについては、刻線から明らかに「朝」字である（表2参照）。しかしその次の文字に関しては、□とするものが多いが三續掖縣志は「廷」としている。書壇院整本旧拓を過眼すると「津」にみえることを前号で述べたが、今回「十」字未損本を過眼するとここの刻された文字は「津」にも「廷」の異体字「迋」にも見える。よって両論を併記することとする。

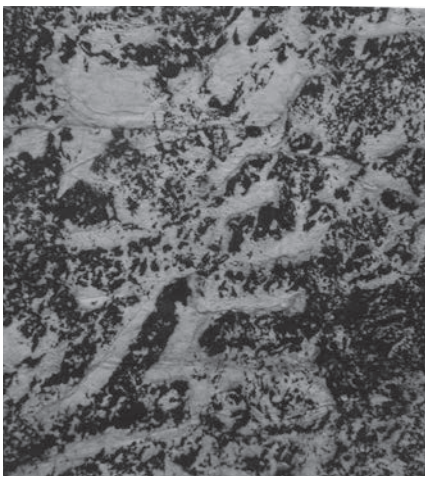
衣を拂ひて朝津（朝廷）を出で、緩歩して煙域に入る。

・心を奮い立たせ、朝の港（それとも朝廷か?）を出て、ゆっくり歩いてかすみの立ち込める仙境に入った。

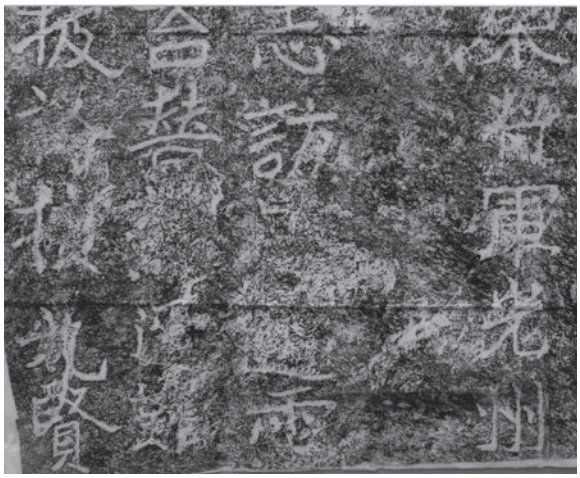
「奮い立って」は、「意を決して」との意味ともとれるため、意を決して朝の港を出たのか。思い切って朝廷を出たのか不詳、この二説を記しておくこととする。

拂衣（ふるいたつ）、朝津（あさの船着き場）、朝廷（天子が政治を執るところ、

四



▲写真２



▲写真３

緩歩（ゆっくり歩く）

7　苔替□逕難　　苔替□逕難

8　**巃**嵸星路逼　　**巃**嵸星路逼　　**巃**嵸星路逼　　**巃**嵸星路逼

7の3字目は旧拓（写真1の2行目）をみても摩滅し不詳。

苔は□逕を替えて難くし、**巃**嵸（ろうき）として星路に逼（せま）る。

・はえた苔が、□の小路を覆い尽くして歩きにくくし、山々はとても険しく高く星路（天）に迫っている。

巃（山のけわしいさま）、嵸（高い）

9　霞旌照□（髪 or 笔）　　霞**桂**照□**轚**疑

10　鳳駕縁虚絶　　鳳駕**縁**疑虚絶　　霞旌□□□　　鳳駕縁**虚**虚絶

9の5字目（写真2参照）は、前号の研究では、磨滅しながらも残された刻線の字形から〔老 or 差〕と推定した。ところが研究を進めていくうちにこの箇所は、この文字の上部に冠となる筆画があり、「**轚**」（『再續掖縣志』による）と「**笔**」（伊藤滋「『論経書詩』と題字四種」釈文による）の別説が見つかった。「**轚**」は、「馬のたてがみ・魚の背びれ・虹の湾曲の形容」という意味を持つ。「**笔**」は、「**桂**、或从竹也。」から「**桂**」という漢字と同じで、柳行李の意味である。「鳳駕」は、天子や仙人の乗る車の意。「絶」は、「あか・あかいさま・おそれる」の意。石井昌子氏によると「東岳大帝のはたらきは、早暁に廟を出て鑾輿（天子の御車）に駕（の）り、侍従百官を従えて出巡し、人間界の善悪を視察」〔注2〕という。「夕陽兮絶紅」という語もあるがここでは早暁つまり朝陽（朝日）と考える。そこでこの二説をここに当てはめると次のようになる。

①　霞旌（かせい）、□**轚**（き）を照らし、鳳駕　虚絶に縁る。

②　霞旌、□**笔**（ろう）（**桂**（ろう））を照らし、鳳駕　虚絶に縁る。

①は、霞と旗は、□の湾曲した虹を照らし、仙人の乗った車は、朝日に赤々と照らされている。②は、霞と旗は、□の柳行李

五

を照らし、仙人の乗った車は、朝日に赤々と照らされている。
となる。

11　披**論**接九賢　　披**衿**接**九巍**賢
12　合蓋高**嶺**極　　合蓋高**嶺**極

〜11の2字目（写真3最終行）は、大部分の諸本の釈文は「衿」とし、「披襟」（心の中を打ち明ける）の意としている。しかし私は前号で理由を述べたが、残された刻の状態から「論」とみる。

論を披（ひら）きて九賢に接し、合蓋たる高**嶺**を極む。

・自分の考えを打ち明ける（議論する）ために九賢に会い、幾重にも重なり合った高い高い頂上を極めた。

この九賢を鄭道昭摩崖「九仙之名」にみる九人の仙人とみる説と、十人で登っているので、鄭道昭を除いた九人の賢人との見方もある。

13　崢嶸非一巖　　崢嶸非一巖
14　林巒迭嶢嶥　　林巒迭嶢嶥

崢嶸（さうくわう）として一巖に非ず。林巒として迭（たがひ）に嶢嶥（げうがう）。

・高く険しくそびえるさまは一つの大きな岩だけではない。ごつごつと林のようにめぐり連なり、かわるがわる険しい岩山がそびえたっている。

崢嶸（高くそびえるさま・高くけわしい・谷など深くてきけんなさま）、巖（いはお・大きな岩）、巒（めぐり連なった山の峰）、迭（たがひに、かはるがはる）、嶢嶥（山の高峻の貌）

15　雙闕承漢開　　雙闕承漢開
16　絶巘虹縈勅（刻）　　絶巘虹縈勅

16の5字目勅を「勅」とする説が多いが、「刻」と見る説（藤原楚水説）に従う。

雙闕、漢を承けて開き、絶巘虹は勅に縈（めぐり）たり。

・雙闕（二つの門）は、天の川を仰いで（天に向って）そそり立ち、切り立った山の虹は、まるで刻に絡みついているようだ。

雙闕（二つの門）、漢（天の川）、勅（天子のことば・みことのり）

17　澗岨禽跡**迷**　　澗岨禽跡**述**
18　竇**狹**鳥過亟　　竇**狹**鳥過亟

澗岨、禽跡迷ふ。竇狹（あな）くして鳥過ぐること亟（はや）し。

道教の宗教施設を道観・宮観・道院などと呼ぶが、山中にあるものは多くが自然の洞穴や石窟（いわや）のある地点が尊ばれるという。

・谷川と険しい山道は、鳥獣のゆくえをも迷わせる。洞穴は狭いが、鳥が通り過ぎるのは、すばやい。

澗（谷川）、岨（けわしい道）、跡（あと・ゆくえ）、竇（あなぐら・門の傍らの小さい戸・みぞ）

19　層穴通月遂　　層穴通月□
20　飛岫陵地億　　飛岫陵地億

層穴、月遂（げつすい）を通し、飛岫（ひしう）、地億（やすら）かなるを陵す（凌（しの）ぐ）。

・幾重にも空いた穴は、遠くから差し込む月光を通し、洞穴のある高い山の峰や頂は、地が安らかになるをしのいでいる（超えてそ

びえる）。

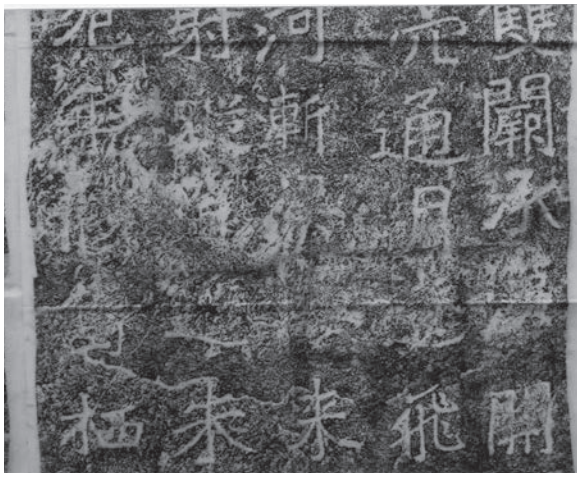
遂（とげる・遠い郊外の地・王城から百里以遠の地）、飛（とぶ・こえる・たかい）、岫（山のほらあな・みね・山の頂）、陵（しのぐ・凌ぐと同じ）、億（数の名のほかに、おもんぱかる・安んじるの意がある。）

21　廻首眄京**閑**　　回首眄京關
22　連川**眇**未即　　連川□未即

22の3字目は、書壇院蔵旧拓により「眇」にみえる。「**閑**」は「門のはしらのますがた」の意だがここでは「關」として用いていると考える。

首を廻らし京**閑**（關）を眄ん。川連なりしも眇たり未だ即かず。

・首をぐるりとまわして（ふり返って）都の方角を見る。川はずっと連なってはいるが、（都への入口は）はるか遠くてもうあとを追うことはできない。



▲写真４

眄（みる・ぐるりと見まわす意。現在では、流し目に見る意に用いられる。）、京關（都の関所・出入り口）、眇（びょう・すがめ・片方の目が小さいかみえないことを表す。転じて、小さい・遠い・はるかの意も表す。）、即（つく・位置につく・ちかづく・いたる・あとをおう。）

23　還濟河漸**梁**　　還濟河漸□
24　□來塵玉食　　□來塵玉食

23の5字目は「梁」にみえる。（写真4の3行目参照）24の1字目は摩泐のため不詳。23「還濟河」を「還、河を濟る」とも読めるが、調べていくうちに「濟」と「河」は名詞であり、古代中国の四瀆（中国の四大河・長江、黄河、淮水、済水）ではないかと思えてきた。四瀆は古くから神としてまつられてきた。「済水」と「黄河（河水）」は山東省を流れている。文意から24の□は反語の意の漢字か？

濟・河を還らば、漸く梁。□來塵・玉食

・濟水と黄河〔という大河〕をめぐると、ようやく橋梁が。塵（俗世のちりや欲）やぜいたくな美食（くらし）は〔ここまで〕やって来ようか〔やって来はしない。〕

梁（橋梁・はし）、塵（ちり・悟りを開くのに妨げとなる欲）、玉食（ぜいたくな食）

25　蔵名隠仙丘　　蔵名隠仙**邱**聖諱
26　希言養神直　　希言養神直

名を蔵して仙丘に隠れ、希言神直を養ふ。

・名を捨てて仙人の棲む丘に隠遁し、寡黙して正しくまっすぐな心を養う。

七

27　依微姑射蹤　　依微姑射蹤
28　逍遥朱臺日　　□逐疑朱臺日　　逍遥朱臺日

28の1字目「逍」はその頭部が旧拓では、はっきりとみえる。（写真4の4行目参照）

依微たり姑射の蹤、朱臺を逍遥せし日。

・はっきりとしない姑射山の仙人の足跡（事跡）を追って、朱陽の台をさまよい歩いてひとひ（一日中）〔過していると〕

依微（ぼんやりとしたさま）姑射は、姑射山のことで、仙人の棲む山。『荘子』逍遥遊、蹤（あと・足跡・事跡・ゆくえ）、逍遥（さまよう・気ままに歩く）、朱臺（朱陽の台のこと）

29　爾時春嶺明　　爾時春嶺明　　尓時春嶺明
30　松沙若點殖　　松沙若點殖　　松沙若點殖

爾の時春嶺明かに、松沙　點殖するが若し。

・その時、春の連山（山の峰々）がくっきりと〔目に映り〕、まるで松や沙（小さな石）が点々と植えられているようであった。

31　攀石坐危垂　　攀石坐危垂　　攀石坐危□
32　飛鳥栖傾側　　□島栖傾側　　□□栖傾側

31の5字目は「垂」。32の2字目は「鳥」（写真4の5行目参照）

石に攀りて危垂に坐す。飛鳥傾側に栖む。

・岩の上をよじ登って危険な切り立った崖の端に座って（あたりを見回す）と、飛鳥が斜めに傾いた場所（岩場）をすみかとしていた。

危垂（危険な端）、栖（すむ・すみかとする）

33　談對洙嶼賓　　談對洙嶼賓　　談對洙嶼賓
34　清賞妙無色　　清賞妙無色　　清賞妙無色、

談對す、洙嶼の賓、清賞の妙　無色たり。

・洙嶼の賓と対談（語り合う）した。たとえようもなく清らかな妙は、無色界のようであった（目や心を楽しませ尽きることがなかった。）。

妙（たへ、善美の極致）、無色（仏教や道教でいう無色界のことと思われる。物質の束縛を脱して精神だけの存在する世界。無色天ともいう。）

35　圖外表三玄　　圖外表三元　　圖外表三元恭代
36　經中精十力　　經中精十方　　經中精十力

圖外に三玄を表し、經中十力を精す。

・圖外に三玄を表して（奥深い内容を明らかにして）、經中の十力を明らかにした。

三玄（『老子』・『荘子』『周易』のこと）、十力（如来が具えている十種の不可思議な知恵の力）

37　道音動齊泉　　道音動齊泉　　道音動齊泉
38　義風光韶棘　　義風光韶棘　　義風光韶棘

道音　動くこと泉と齊しく、義風韶棘を光らす。

・道を説く声を動かすことは、泉がわくことと等しく、義風（善い風）は春うららかにいばらを照らしている。（さわやかな風が春麗しく、いばら等のはえた山林を吹いている。）

義（正しい筋道・君臣のあいだの道徳）
韶（つぐ・美しい・うららか）、棘（いばら・こなつめ・ほこ）、山東省の山々

八

には「なつめ」や「山楂」などが多くはえている。

39　此會當千**齡**
40　斯觀寧心識

39　此會當**早齡**
40　斯觀寧心識

39　此會當**孤齡**
40　斯觀**甯恭代**心識

〜39の4字目は、日本の文献では「千」が通説となっているが、中国の文献では、B・Cの「早・弧」の他に、前号で述べたが「十」とする説もある。

此の會　當に千齡なるべし。斯に觀る、心識の寧（やすら）かなるを。

・このつどいはまさに永久に変わることのないものである。ここに見ることができる。心やちえが安らかになるのを。

41　目海淺毛流
42　看崖瞥鴻翼

41　目海淺毛流
42　看崖瞥鴻翼

41　目海淺毛流
42　看崖瞥鴻翼

海を目（もく）せば淺毛流れ、崖を看れば鴻翼を瞥る。

・海を見つめると浅く小さな川が幾重にも流れ、崖を見ると、おおとりが羽搏いているのが見える。

目（め・まなざし・見つめる）、淺毛（薄毛）

43　相翔足終身
44　誰辨瑤與**石**（？）**推**

43　相翔足終身
44　誰辨瑤与**石**

43　相翔足終身
44　誰辨瑤与□

〜44の5字目は、旧拓でも摩滅が激しく不詳。ここでは意味上から古文献Bの「石」説を採る。ほかに「**玏**（うく）」（清原実門氏の説より）の説がある。**玏は玉に次ぐ美石のこと。**

相翔（あひかけ）りて身を終るに足る。誰か辨ぜん、瑤（えう）と石を。

・ともに羽搏いて一生が終われば十分である。誰が、瑤（玉）と石（石ころ）を区別できようか。

瑤（えう・美しいたま）、辨（わきまえる・区別する）、與は与の旧字体

45　**万象**自云云
46　焉用挂情憶

45　**方界**自云云
46　焉用挂情憶

45　**万象**自云云
46　焉用挂情憶

〜45の1字目は、「万」が正。拓本では上部に点のような欠けがあるためBは「方」と誤読

萬象自ら云云たり。焉（なん）ぞ情憶を挂（かか）げて用いん。

・すべてのことは、しかじかかようである。どうしておもいを分かちて用いられようか。

云云（うわさをする・しかじかかよう・ことばのおおいさま・さかんなさま・雲がわきおこるさま）

47　槃桓竟何爲
48　雲峯聊可息

47　槃桓竟何爲
48　雲**峰**聊可息

47　槃桓竟何爲
48　雲峯聊可息

槃桓（ばんくわんつひ）竟に何を爲さん。雲峯聊か息（いこ）ふべし。

・進み難いさまはいったい何をしたらよいのであろう。雲峯山でほんの少し休憩するがよい。

槃桓（進み難いさま）

魏永平四年
歲在辛卯刊

魏永平四年
歲在辛卯刊

魏永平四年
歲在辛卯刊

魏永平四年、歲在辛卯刊す。

・北魏の永平四年（五一一）、辛卯の年に作る。

摩崖刻の八行目から始まる「論経書詩」本文の漢詩文五言古詩全文（四十八句）を岩に刻された通りに次に記した。ここでは本文中で二説示したものは最初に記したものを記した。また、□の右側に附した小番号（1～6）の文字は、摩泐により、解明できなかった不明字であるが、今回の研究で、新たに推定ながら小番号2に関しては「引」、小番号6に関しては、「石」が候補に挙がることが判った。

／　　行数

靖覺鏡□[1]津・浮生**歷**人職・聳志訪[引][2]遊・雲／　8

峻期登陟・拂衣出朝津・緩歩入煙域・苔替□[3]逕難／　9

巃嵸星路逼・霞旌照□[4]髮・鳳駕縁虚絶・披論接九賢／　10

合蓋高**嶺**極・崢嶸非一巖・林巒迭嶢嶨・雙闕承漢開・絶／　11

巘虹縈勅・澗岨禽跡迷・竇狹鳥過亟・層穴通月遂・飛岫／　12

陵地億・廻首眄京**閑**・連川眇未即・還濟河漸梁・□[5]來塵／　13

玉食・蔵名隠仙丘・希言養神直・依微姑射蹤・逍遥朱臺／　14

日・爾時春嶺明・松沙若點殖・攀石坐危垂・飛鳥栖傾／　15

側・談對洙嶼賓・清賞妙無色・圖外表三玄・經中精十識／　16

目海淺毛流・看崖瞥鴻翼・相翔足終身・誰辨瑤輿[石][6]・／　17

力・道音動齊泉・義風光韶棘・此會當千齢・斯觀寧心萬象／　18

自云云・焉用挂情憶・槃桓竟何為・雲峯聊可息／　19

魏永平四年歳在辛卯刊。／　20

まとめ

鄭道昭摩崖は山東省の人里はなれた山々に刻されたため、時を経ると長い間、人から忘れられ、草木の茂った中に埋もれ、また時には苔むした頃もあったかと想定され、摩泐以外にも文字のよみにくい時期や要素があったと考えられる。また、大きさがとても大きいため訪れたとしても過眼のみで採拓にまで至らないことが多かったものと考える。ゆえに唐・宋時代の拓の存在は望みがうすいと考える。今日みられる論経書詩の旧拓の類はみな清朝に入ってからのものと考えるが、その中でも「十」字未損本が存在していたという事実に驚いた。

先行研究として口語訳については『書学体系碑法帖篇第二十巻』所収の清原実門氏のものなど、また意訳に関しては中国で刊行された『雲峯刻石研究（二）』所収のものがある。本稿は清時代の現地の知事らによって編纂されたいわゆる公的な文献からの再検討を試み、なるべく直訳につとめ不明な箇所を更に埋めていったものである。古来いろいろな学者が釈文及び和訳を試みているが、どれも不明字が多く、かつ難解であるため、拙稿では不明字の解明と口語訳に全力を注いだ。これにより新しい解釈が見えてきた箇所も出てきたが、まだ明らかにできない箇所も存在する。更に古い旧拓や新たな古文献の記述の発見など今後の研究にゆだねたい。

今回も文字比較に公益財団法人書壇院蔵旧拓の写真（写真1～4）を用いさせていただきました。重ねて深く感謝申し上げます。

注

（注1）乾隆二三年（一七五八）に時の知掖縣事（県知事）の張思勉修・于始瞻纂の最初の掖縣志が作られた。その後、續掖縣志・再續掖縣志・

三續掖縣志が刊行されたが、この四種を合訂したものが「掖縣全志」である。

（注2）　泰山の神『道教の神々と祭り』44頁による。

参考文献

・「掖縣全志」光緒一九（一八九三）
・「再續掖縣志」巻上　道光二二（一八四二）
・「三續掖縣志」訂譌　光緒一九（一八九三）
・「書跡名品叢刊　北魏・鄭道昭　論経書詩」上・下　１９７１　二玄社
・中田勇次郎「書道芸術」第二巻　智永・鄭道昭　昭和46　中央公論社
・藤原楚水「註解名蹟碑帖大成」上巻　１９７６年５月　省心書房
・李靖・徐明・王錫平主編『雲峯刻石研究（二）』２００８年11月　済南・黄河出版社
・書壇院ギャラリー第一〇〇回記念展（企画展示）
　「鄭道昭展」図録　平成27　公益財団法人書壇院
・廣瀬裕之「鄭道昭摩崖考Ⅰ」
　『全国大学書道学会研究集録・平成二年度』所収
・廣瀬裕之「鄭道昭・論経書詩考―旧拓整本による不明字解明の試み」
　『武蔵野大学教職研究センター紀要・第四号』２０１６所収
・書学体系・碑法帖篇第二十巻
　種谷扇舟・清原実門「論経書詩二」１９９５　同朋舎出版
・野口鐵郎・田中文雄「道教の神々と祭り」２００４年12月　大修館書店
・木雞室金石選集第二巻
　伊藤滋「鄭道昭論経書詩　題字四種」２００３　日本習字普及協会
・山東石刻芸術博物館・莱州市博物館「雲峯刻石全集」１９８９　斉魯書社出版

＊武蔵野大学教育学部